

『ロンバード街』における「高貴な部分」

——ウォルター・バジョットの政治経済思想を総合する試み——

山 根 聡 之¹⁾

はじめに

本稿で筆者は、イギリスの政治経済評論家ウォルター・バジョット (Walter Bagehot, 1826-77) を取り扱う²⁾。バジョットは、次の二つの著書で名高い。第一は、『イギリス国制論』(The English Constitution, 1867)、第二は、『ロンバード街』(Lombard Street, 1873) である。前者においては、ヴィクトリア朝のイギリスの政治機構が現実的・具体的視点に基づいて描かれている。また後者においては、イギリス金融市場が19世紀半ばのイングランド銀行による市場調整機能を重視する観点から分析されている。

本稿の目的は、バジョットの「高貴な部分」(dignified parts) と「機能する部分」(efficient parts)³⁾ という『イギリス国制論』におけるイギリスの統治機能に対する分析視角を、彼の後の作品である『ロンバード街』において全面的に適用することで、これまで政治・経済の分野でそれぞれ独立していたバジョット研究を総合することにある。『ロンバード街』は、単なる当時のイギリス金融市場の分析やイングランド銀行への提言にとどまらない。筆者は、『ロンバード街』には『イギリス国制論』の明確な分析視角の応用のもとで、中央銀行における「機能する部分」への「高貴な部分」の付与があったと主張する。バジョットはイギリス金融市場を分析する際に、独自の政治社会学的図式を導入した。以上のように想定することで、バジョットの統一的な全体像を描くことができると思われる。

1 先行研究の整理と問題設定

バジョットの業績、および彼に関する政治・経済分野の理論・思想に関する先行研究を整理すると次のようになる。政治分野では(1)政治機構上の権威(高貴な部分)と権限(機能する部分)に関するもの⁴⁾、(2)イギリス政治社会の進化論的把握に関するもの⁵⁾、の二つに大別される。本稿は特に(1)に基づいて議論を行なう。次に経済分野であるが、(1)金融上の問題、特に恐慌と中央銀行の「最後の貸し手」機能に関するもの⁶⁾、(2)自由貿易や大蔵省証券(treasury bill)に関するもの⁷⁾、(3)経済学説的分析に関するもの⁸⁾、の三つに大別される。『ロンバード街』は(1)に関わる議論である。

確かにバジョットの論考は方法論的に断片的なものが多い。経済理論の分野で言えば、労働移動や資本移動については論じられているものの、貨幣論や地代論といった個別の経済現象を対象とする、はっきりとした体系的理論を創出していない⁹⁾。だが仮にそうであるにせよ、バジョットが単なる時論的評論家であり、見るべき思想を生まなかったという評価を下すのはいささか早計なのではないか。

従来のバジョット研究では、彼の業績(中央銀行の「最後の貸し手」や大衆操作の重要性など)を一つの命題として、そこから現在の君主制の問題や金融上の議論に引き寄せて語られることが多かった¹⁰⁾。したがってバジョットの理論・思想の全体像を改めて検討・分析するものは多くなかった。とりわけ、バジョットの政治と経済上の貢献を密接に結びつける研究は少なかった¹¹⁾。だが後述するように、バジョットが制度の機能的側面よりも心理的側面を重視したことに注目すると、これまでの研究で別々に切り離されてきた彼の政治面での論考と経済面での論考が、制度における心理的側面の重視という文脈において有機的なつながりを持つのではないか、と思われるのである。

手がかりはケインズの次のような指摘にある。ケインズはバジョットの全集に寄せた書評で、理論家としてのバジョットは評価しないが、心理分析家としては大いに認めている。「これら全て(バジョットの「経済理論・思想」——引用者註)は、経済学というよりは経済的叙述についての心理学である。『ロンバード

街』が金融の心理学であって、その理論ではないように」¹²⁾。ケインズによれば、バジョットによるイギリス金融市場分析の特徴は、集団的社会心理の分析方法を用いている点にある。なぜならバジョットは、シティの人々に向けて、イギリス金融市場の姿を明らかにしながら金融政策の手引きやいくつかの改善点を教えるという、实际的な意図のもとに『ロンバード街』を書いたからである。この实际的な意図のために、ロンバード街の支配原理を「経済学的と言うよりもむしろ心理学的」に叙述したことがバジョットの議論の真骨頂である。それは準備金の原則や「恐慌を終息させる正しい方法は自由に貸し出すことである」といった原理である。つまり彼は金融問題の当事者の主体的側面(心理や行動)に焦点を合わせることで、市場の不確実性、強気・弱気といった心理学的アプローチを行なったのである。

そこで筆者は、バジョットがしばしば用い、また従来研究においても最も重要視された分析上の枠組みである二分法を重視する(後で詳述するようにバジョットは、イギリスの政治制度を「高貴な部分」と「機能する部分」とに分けて考察した)¹³⁾。従来の彼の二分法についての指摘は、その大部分が彼の政治評論に関する研究で行なわれた。残りが文学評論についてのものであり、この領域でもある程度共通の認識として存在していた¹⁴⁾。しかしこれまで、彼の経済制度の理解、特に『ロンバード街』における金融市場の構造理解において、彼が『イギリス国制論』において展開したような二分法的分析を用いている点に触れる研究は、ほとんどなかったと言って良いだろう¹⁵⁾。

筆者は以下で『ロンバード街』での主張と政策提言に、二分法的分析の中でも特に『イギリス国制論』の権威についての分析視角がいかに大きく適用されていたかを見る¹⁶⁾。より具体的に言えば、『イギリス国制論』における国制上の「高貴な部分」(権威)と「機能する部分」(権限)という分析視角が、『ロンバード街』においてどのように反映されているのかを吟味する。以下、第2節では『イギリス国制論』におけるイギリス国制の分析概念である、「高貴な部分」と「機能する部分」について検討する。第3節では『ロンバード街』発表の背景と政策提言について考察する。第4節では『ロンバード街』に『イギリス国制論』の分

析方法がいかに構造的に継承されているかを明らかにする。最後にバジョットが「高貴な部分」を重視したことの意義と今後の研究課題について簡単に述べる。

2 『イギリス国制論』の分析視角

最初にバジョットの政治制度論・統治機構論の検証から議論を始めたい。バジョットは『イギリス国制論』の冒頭で、次のように述べる。

「これまでにイギリスの国制 (English Constitution) に関して書かれた文献は、おびただしい数にのぼっている。しかし生きた現実 (living reality) を考察するなら、紙上の解説 (paper description) と正反対のことであることに驚かされる。また実体を見ると、書物に書かれていないものがたくさんある。なおまた実際をありのままに眺めてみると、書物に書かれているような多くの明快な理論は、見当たらないのである」¹⁷⁾

このように、バジョットは従来の政治機構における分析的枠組みの批判、すなわち三権分立論の打破から議論を始める。彼によれば、イギリスの統治機構の特徴は、「紙上の解説」、すなわち三権（立法、行政、司法）の分立および結合にはない。ではイギリスの政治制度の「生きた現実」とは何か。彼はイギリス国制において重要な点は、その国制が事実認識としてはっきり二つに分かれている点にあると看破する。すなわちイギリス国制には、君主を頂点とする王室および貴族院が担う「高貴な部分」と、内閣および庶民院が担う「機能する部分」の二つの要素があり、これらが融合していると指摘したのである。

イギリス国制をこのように把握した上で、バジョットは「あらゆる国制は、まず権威を獲得し (gain authority)、次いでその権威を行使し (use authority) なければならない」¹⁸⁾ と述べる。ここでの「機能する部分」とは、後で述べる「高貴な部分」によって獲得された権威を実際に行使する部分である。「機能する部分」には、イギリス国制では内閣と庶民院が該当する。一見したところ、国制は「機能する部分」だけで維持可能なように思われる。しかしバジョットは、実

際の政務を担当する本体である「機能する部分」だけではイギリス国制は存立し得ない、と考える。「機能する部分」という統治機構の本体は、「高貴な部分」という外装をまといねばならないのである。なぜか。その理由は彼が制度を構造的把握する際に、常に権威の果たす役割を重視していたことに深く関わっている。彼にとって「権威の問題は実際にリアルな問題だった」¹⁹⁾。

バジョットは、イギリス国制の「高貴な部分」が「民衆の尊敬の念を呼び起こし、保持する部分」であり、先で述べた「機能する部分」が「それによって国制が実際に活動し、支配する部分」²⁰⁾であると定義する。もちろんバジョットは、君主と貴族院が内閣と庶民院に権力の実体に移行した現状を了解していた。確かに「紙上の解説」によれば、君主と貴族院はもはや幻影、過去の残滓にすぎない。だがバジョットは「生きた現実」を読みとって、それらに「計り知れない」意義を見出した。君主、あるいは貴族院の威信は、当時の公衆を統合するためには依然大きな効果を持っていた。

「彼ら（イギリス国民——引用者）は、いわゆる社会の演劇的な見せ物に敬意を払っている。彼らの面前を華麗な行列が通り過ぎる。威儀を正したお偉方や、きらびやかな美しい夫人たちが通って行く。そしてこのような富や享楽の素晴らしい景観が展開すると、彼らはそれに威圧される。すなわち彼らは、想像の世界で屈服し、彼らの前に展開する生活ぶりを眺めて、とうてい対抗できないと感じるのである。……宮廷や貴族階級は、公衆を支配するための偉大な資格を備えている。すなわち、公衆の注目を引くものを持っている。宮廷人は、他の者のできないことができる。なるほど庶民は、舞台の俳優と張り合ってその所作事を真似るように、貴族のすることを真似ることができる。しかし上流社会は、第三者から見ればよくわかるように、俳優の方が観客よりもはるかに素晴らしい演技を行なう舞台なのである」²¹⁾

このようにバジョットは、イギリスの政治機構上の権威が持つ心理的要素に注目する。イギリス国制を維持するためには、当時の教育を受けていない大多数の

教養のない公衆に向けて、容易に想像できる「わかりやすい」対象が必要である。そしてその「わかりやすい」対象は、理知的な人間に対しても効果があると彼は言う。

「最も理知的な人間でも、自分の意志によって動かされるのと同程度に、生活慣習によっても動かされている。一般に、人間の能動的な自由意志による活動部分は非常に少ない。そしてこの活動部分といえども、惰性的な習慣に助けられて、ようやくその目的を達しているのである」²²⁾

「たいていの人間の行動を導くものは、変わることもない人類の伝統的習慣である」²³⁾

バジョットは、人間は理性よりも感情によって行動しがちであることを見抜いていた。確かに、三権分立によってイギリスの政治機構を見ることは正しい。しかしそのような「紙上の解説」は、形式的法律的側面から見てそれがいかに論理的に正しかろうと、事実と見比べてみるとわかりにくいし、何よりも親しみが持てない。むしろ公衆に説明し理解してもらう場合には、論理よりも感情に訴えかける方が、つまり当時で言えばヴィクトリア女王が支配するイギリス、と説明する方がはるかにわかりやすいし、何より公衆になじみ深い。ことイギリスの政治について理解する場合、親しみやなじみといった伝統的・慣習的要素が占める役割が大きいとバジョットは考えるのである。

以上のように、「機能する部分」と「高貴な部分」というイギリス国制上の二面性を説明した上で、バジョットはイギリスが採用する立憲君主制を皮肉にも「偽装された共和制」(disguised republic)と呼んだ²⁴⁾。制度は、現実的な権力関係と大衆統合の象徴的役割という二側面から成り立っているというのである。このように国家体制の存続において、人々の心理的要素を重視したことが『イギリス国制論』におけるバジョットの理論の大きな特徴であり、そのため彼が政治・社会心理学の先駆者と評される場合もある。そしてこの心理的要素の重視という視点こそ、後の彼の著書『ロンバード街』に全面的に継承されている、と筆

者は考える。

3 『ロンバード街』の分析視角と政策提言

『ロンバード街』は金融史上の重要文献として今日も広く認知されている。とりわけ本書が評価されているのは「最後の貸し手」(the lender of last resort)としてのイングランド銀行の本質的役割についての説明、いわゆる「バジョットの原理」(Bagehot's principle)である。「最後の貸し手」とは、経済全体の信用システムにおいて貨幣の流動性に一時的な問題が生じた場合、つまり金融機関の支払い不能(例えば預金取付の発生)によって不安が生じる恐れがある場合に、中央銀行がその不安を解消すべく救済に乗り出す機能である。

『ロンバード街』執筆のきっかけは1866年恐慌だった。当時ロンドンの金融の中心地シティで重大な役割を果たしていたオヴァレンド・ガーニー商会(Overend, Gurney & Co)というビルブローカーの経営破綻が信用恐慌を引き起こしたのである。その際、イングランド銀行は「最後の貸し手」機能を発動せずに民間銀行としての経営姿勢を崩さず(準備金流出を回避すべく、バンクレートを引き上げた)、それゆえに恐慌が拡大してしまった²⁵⁾。バジョットは、この時にイングランド銀行が「最後の貸し手」機能を発動せず、そのために信用恐慌が広がったという事実をふまえて、イングランド銀行に中央銀行としての自覚が欠けているのではないかと考えたのだった。

ここで注目されるのが、バジョットが編集主幹を務める雑誌『エコノミスト』(The Economist)とイングランド銀行の老練な理事ハンキー(Thomson Hankey)との、イングランド銀行の役割をめぐる論争である。まず『エコノミスト』を通じてバジョットは、イングランド銀行が苦境に陥った市中金融機関を援助すべし、と主張した。これに対してハンキーは「……イングランド銀行の業務の経営は、連合王国内のあらゆる他のうまく運用されている銀行と同様にされておれば、それでよい」²⁶⁾と真っ向から反対した。ハンキーは、イングランド銀行があくまでも民間銀行としての立場を維持すべし、との意見を展開したのであった。バジョットの目にはハンキーの主張が、イングランド銀行による公的な責任逃れ

と映ったに違いない。

ここで当時のイングランド銀行の二つの側面を見よう。すなわち(1) コマーシャルバンク (メガバンク)、(2) 中央銀行という側面である。第一のコマーシャルバンクの側面、これは自行の利益を最優先する銀行組織である。上述したハンキーの立場であり、自行の利益追求を原則として行動し、公的な活動は二次的なものにとどまる。第二の中央銀行の側面、これはイギリス金融市場の安定を最優先する組織である。バジョットの立場であり、イギリス経済全体を視野に入れたマクロ的観点から行動する。こう考えてみると1866年恐慌時のイングランド銀行の行動は、中央銀行としてではなく、コマーシャルバンクの発想からの行動だったことがわかる。結果、イギリス金融市場は恐慌に陥った。当時の同行政策の中には、絶えず「利益集団政治」と「公益政治」とのせめぎあいがあった。

政治はもとより、金融においても人々の心理的側面に注目するバジョットは、おそらくイングランド銀行内部で同行の立場が未だ確定されていないことについて、いらだちを覚えたに違いない。とりわけ銀行家バジョットからしてみればそうだったに違いない²⁷⁾。当時のイングランド銀行内部においても、自行の収益のみ追求すればよいわけではなく、イギリス信用制度全体の準備金の保管者として、準備金の確保と「最後の貸し手」としての機能を発揮するために金融政策を実施する必要がある、ということが一部でようやく認識され始めていた²⁸⁾。そもそも国家の援助によって同行は人為的に設立されたのであり、今や「政府とイングランド銀行は同一視されている」²⁹⁾のである。

『ロンバード街』の提言は、イングランド銀行に対して「中央銀行として存在し、またそうふるまうべき」というイギリス金融市場における公衆の要望を具体的に表現したものだった。ここでバジョットは、イングランド銀行理事を務めるマーチャントバンカーたち³⁰⁾だけに対してではなく、さらに公衆の認知と支持が与えるイギリス経済への影響力に注目したのである。バジョットの見るところ、イングランド銀行は既に事実上の中央銀行として、マクロ経済の中心的役割を果たすようになっていた。したがって、イングランド銀行を他の民間銀行と並置してとらえるというミクロ的競争主体からではなく、イギリス金融市場全体という

マクロ的視野からとらえ、また同行自身が中央銀行としてマクロ経済に及ぼす影響と責任を自覚した上で行動せねばならない、これが『ロンバード街』におけるイングランド銀行に対する政策提言の核心だったのである。ここから派生したのが、後に述べるイングランド銀行理事の専門職化・総裁の常任職化だった。そして筆者はここに『イギリス国制論』の分析視角の応用を見るのである。

4 『ロンバード街』における『イギリス国制論』的構造

『イギリス国制論』と『ロンバード街』は、一方はイギリス国制について、他方はイギリス金融市場についての具体的分析が行なわれている。ただし『ロンバード街』は、金融市場の分析にとどまらず、不況対策、とりわけイングランド銀行に対する抜本的改革案が提示されている点で、より具体的な政策提言書という色合いが強い。

『ロンバード街』でバジョットが考察したのが、イギリス金融市場における経済的権威と経済的機能の役割だった。実際の経済上の機能はもとより、その上で公衆の支持をいかに得るか。問題は公衆の持つ経済的影響力、逆に言えば公衆へのパフォーマンスの重要性をどのように把握するかだった。信用恐慌が起こった際、それを放置しておけば国内市場の沈滞を招き、ひいては国家的問題へと発展する恐れがある。そこでバジョットが重要視したのが、イングランド銀行の権限強化と、それに伴う同行の役割の明確化だった。準備金の大幅な増額や常任総裁制度の導入、専門的銀行家の理事会への登用など、同行の権限の強化を意図した提言が行なわれている。しかしここで注目すべきは、そのような同行の権限強化に加えて権威の増進、すなわちそれを公衆にアピールすることが同行の信用をさらに増強すると考えられていることである。

『イギリス国制論』で示されたとおり、制度は現実的な権力関係と大衆統合の象徴的役割から成立している。したがって、権限(機能する部分)は権威(高貴な部分)が付与されて初めて力を得る。公衆にいかにアピールし、制度を活力あるものとして維持するか。この点に注意して『ロンバード街』を読めば、『ロンバード街』には『イギリス国制論』の分析視角が強く反映されていることに気が

付くのである。

『ロンバード街』の提言でまず注目されるのはイングランド銀行総裁の取り扱い方である。当時のイングランド銀行総裁・副総裁は常任職でなく（ほぼ2年毎に変わった）、また古くからの慣例によって、総裁・副総裁はおろか理事には専門的銀行家が就任することもなかった³¹⁾。イギリス金融市場を統御するイングランド銀行の執行機関に専門家を採用しない慣習は誤りである、とバジョットは考えた³²⁾。そこで彼はイングランド銀行の組織案として、総裁・副総裁の常任化と理事会への専門的銀行家の参加を提案したのだった。ところで、この常任総裁・副総裁に関しては次のようなことが危惧される。すなわち、常任のイングランド銀行総裁はイギリス最高の地位の一つである。一度その椅子に座れば、その者は「イングランド銀行を個人的に表現する者となり、ほとんど無限の威信を絶えず担うことになるだろう」³³⁾。常任総裁はまさに王としてイギリス金融市場に君臨できるようになる。ところがこの絶大な威信が持つ魅力は、虚栄心に富んだ者や権力志向の強い者たちを引き寄せる恐れがある。ではこの危険をどう回避するか。

ここでのバジョットの解答にも『イギリス国制論』の考え方が強く反映されている。先にイギリス国制を「高貴な部分」と「機能する部分」とに分けて見たように、イングランド銀行の執行機関においても、象徴的な職務を同行総裁が、実務を専門家で卓越した実務能力を持つ副総裁および理事会が担うべし、と主張したのである。同行の威厳を表現する外形は総裁に、実務を担当する本体は副総裁および理事会に、というわけである。

次にイングランド銀行内部の組織構造から転じて、同行とイギリス金融市場との関係を見よう。なぜバジョットが『ロンバード街』で、イングランド銀行の「最後の貸し手」機能を提言せねばならなかったのか。「イングランド銀行は単なるイギリス最大の民間銀行ではなくイギリス金融市場を調整する中央銀行である」という認識に立つならば、イングランド銀行がその他の民間銀行と同様の行動原則で活動してはならないのである。1866年恐慌時のように、イングランド銀行は不況時に自行の準備金流出を恐れてバンクレートを上げてはならないのである。そのためには平時からの巨額の準備金保有が必要になるが、そのコストも非

常時(信用恐慌時)のリスクに比べれば目をつぶるに足る額である³⁴⁾。

さて、バジョットがイングランド銀行に「最後の貸し手」としての役割を自覚すべし、と提言したのは、その先に次のような信認過程を見据えていたからではないか、と考えられる。つまり、イングランド銀行が「最後の貸し手」としての役割を果たし、同時に公衆が同行の「最後の貸し手」としての役割を承認し、またその役割の発揮を期待するようになると、結果として同行の経済的権限(機能する部分)を越えた、経済的権威(高貴な部分)が付与されるようになる。ここで『イギリス国制論』の分析視角を用いれば、イングランド銀行は、恐慌時において「最後の貸し手」機能を「行使」するが、まさにその機能によって、平時からイギリス金融市場における権威を「獲得」する、言わば「高貴な部分」として存在するようになる。「獲得」された権威によって、イングランド銀行はもはや、その他の民間金融機関と同様の活動をすることが、つまり単に利益追求原理に基づいて行動することが許されない存在となる。こうしてバジョットはイングランド銀行を中心とするイギリス金融市場における単一準備金制度を「ロンバード街の君主制的形態(The monarchical form of Lombard Street)」³⁵⁾と形容したのである。

さて、筆者が論題としたイングランド銀行の「高貴な部分」とは次のような意味を持っている。すなわちバジョットが、権威に対する非理性的な信用を利用することが、つまり公衆に対する心理的效果が制度上必要だと考えた、ということである。公衆の信用を勝ち取るためには、そこに機能性を越えた「高貴な部分」の存在による心理的效果が不可欠なのである。イギリス国制においては忠誠を得るために君主が、イギリス金融市場においては信用を得るために中央銀行としてのイングランド銀行(あるいは同行を具現する同行総裁)が必要なのである³⁶⁾。公衆は、イングランド銀行という「最後の貸し手」によって苦境に陥った民間金融機関が救済され、また救済される場面を見ている。「最後の貸し手」を差し伸べるイングランド銀行の存在によって、イギリス金融市場に同行に対する信用と、同行の存在に伴う市場の安定性が生まれる。このように意図した結果が、『ロンバード街』の提言へと結実したのではないか。

バジョットはイギリス金融市場を、イングランド銀行内部の組織はおろか、イギリス金融市場全体の構造を、『イギリス国制論』において用いた方法と同様の手法で分析した。『イギリス国制論』では「高貴な部分」と「機能する部分」という二分法によって、イギリスの政治機構が「偽装された共和制」であることが暴露された。また『ロンバード街』では同様の方法論を用いて、つまりイングランド銀行とイギリス金融市場との関係をイギリスの統治機構に見立て、その上で同行への様々な具体的提言がなされた。1870年当時、イギリス金融市場の恐慌というマクロ的経済現象の中に、イングランド銀行による政策的介入という経済政策的観点を導入した『ロンバード街』の提言は画期的だった。そしてこの提言は、従来あまり指摘されてこなかった『イギリス国制論』的視点の全面的導入によってもたらされたことが本稿によって明らかになったと思われる。

おわりに

『イギリス国制論』における忠誠にせよ、『ロンバード街』における信用にせよ、バジョットは人々の心理的要因、つまり「高貴な部分」への欲求とそれに伴う権威の担保の重要性を認識していた。バジョットは中央銀行としてのイングランド銀行の役割に機能性以上のもの、つまり「高貴な部分」による補完が必要であることを見出ししていた。バジョットが『ロンバード街』でイングランド銀行の権限強化を提言したのは、もちろん時論的・経済上の実践的な要請に基づいており、その意味ではやはり政策提言書としての意義が大きい。しかしそこには『イギリス国制論』における「高貴な部分」「機能する部分」という分析的枠組みによる制度理解が根幹にあったと言える。

最後に、本稿で明らかにされたバジョットの政治経済上の認識に基づいて、今後以下のような課題に取り組むことが考えられる。本稿における筆者の発想の原点は、社会学者としてのバジョット像を提示すべく、彼の社会哲学を理解するために『ロンバード街』を読み直すというものだった。本稿におけるその試みは紙面の制約で十分に展開できなかったが、別稿では彼のもう一つの主著『自然科学と政治学』(*Physics and Politics*, 1872)を通じて、社会学者としてのバ

ジョット像に迫りたい。

1) yamanesa@mb.infoweb.ne.jp

本稿執筆に際しては、本誌匿名のレフェリー、一橋大学経済学部の神武庸四郎先生、経済研究所の西沢保先生、菅一城先生、大阪市立大学経済学部の佐藤光先生をはじめ、多くの皆様から貴重なコメントをいただいた。ここに感謝の気持ちを捧げたい。なお、本稿の内容に関する全ての誤りは筆者一人の責に帰するものである。

2) バジョットの著作に対する言及および引用については、全て *The Collected Works of Walter Bagehot 15 Vols.*, ed. Norman St. John-Stevás (London: The Economist, 1965-86.) (CW と略記) によっている。引用箇所該当ページを示した。本全集に収められている *The English Constitution*, *Lombard Street* については、それぞれ小松春雄訳『イギリス憲政論』(中央公論社, 1972年), 宇野弘蔵訳『ロンバート街』(岩波文庫, 1941年)を参照し、該当邦訳頁を示したが、適宜改訳した。なお *The English Constitution* の邦題については従来『英国国家構造論』『イギリス憲政論』などとされてきたが、内容をより適切に表現したいと考え、筆者は『イギリス国制論』を採用した。

3) 従来の我が国のバジョット研究論文においては、*dignified parts* は「尊嚴的部分」「威厳を持った部分」、*efficient parts* は「実践的部分」などと訳されることが多かった。しかし本稿で筆者は、よりバジョットの意図を伝えるのに効果的と考えて、*dignified parts* を「高貴な部分」、*efficient parts* を「機能する部分」と訳した。

4) Balfour (1928) が先鞭を付けたが、決定的なバジョット論が書かれ始めたのは第二次大戦後であると言える。John-Stevás (1959), Crossman (1963), 岩重 (1962, 1971, 1974), 添谷 (1978, 1995) など極めて多くの研究成果がある。その多くは、政治学に心理学の要素を持ち込んだことに対する評価であり、政治上の權威への注目に関するものである。

5) 決して数は多くないが、岩崎 (1949), 吉田 (1978), Jones (1980), 岩重 (1995)などを参照。

6) バジョットに関する研究は、この分野が最多と言うことができよう。King (1936), Sayers (1957, 1976), 峰本 (1978), 伊藤 (1979), 金井 (1984, 1989), Rock-off (1986), 藤田 (1989, 1992), Laidler (1991), 鈴木 (1998), 大黒 (2000), O'Brien (2001), 小栗 (2001)などを参照。

7) King (1961), Sayers (1978)を参照。

8) とりわけ経済理論・経済思想、そして『エコノミスト』に関するバジョット研究で大きな貢献を果たしたのが岸田 (1979, 1983, 1984)である。他に藤田 (1990),

Zouboulakis (1999)などを参照。

- 9) バジョットは晩年、労働移動の問題、資本移動の問題について模索していた。詳しくは Bagehot, W. *Economic Studies* (1880)., Cf. *CW 11*. 参照。また経済理論上のバジョット研究は岸田 (1979) 参照。
- 10) 例えば20世紀のイギリス王室についての議論では Douglass-Home (2000) を、また戦後のイギリス政治をブレア政権まで分析したものとしては Williams (2000) を参照。あるいは最近の中央銀行の「最後の貸し手」議論については Fischer (1999), Goodhart (2001), 小栗 (2001) などを参照。
- 11) バジョットの政治・経済上の貢献をバランス良く分析した数少ない伝記的業績として、Buchan (1960) がある。またバジョットの政治思想を全体的かつ詳細に論じたものとしては、特にバジョット全集の編者である John-Stevas (1959) が優れている。
- 12) Keynes, J. M. (1915), p.533.
- 13) 「バジョットには原則として問題を二種類に分けたがるという文体上の癖がある」John-Stevas(1963) p.12. また同様に Haley (1965) は、バジョットは物事を対照的に考える傾向があったことを指摘している。政治評論におけるバジョットの思考様式における二分法の例については、まず Crossman (1963) における「バジョットの法則」(Bagehot's law) がある。ここでは、バジョットによる「本体」と「外形」というイギリスの国家構造上の運動原理(時代の変化に応じてかつて統治上の本体だった部分が外形へと転じ、「高貴な部分」になる)の発見に高い評価を与えられている。また邦語文献でとりわけ重要なのが、岩重 (1973) である。それまでの「バジョットにおけるアンビヴァレンス」概念の考察が、見事に政治的権威論として結実している。
- 14) なおバジョットの文学評論上の二分法についての指摘はアーヴィン (1981-84), イーグルトン (1984) を参照。
- 15) 若田部 (2003). イングランド銀行総裁の常任化について、『イギリス国制論』の影響があることが触れられている。
- 16) 藤田 (1989) によれば、バジョットの「金融経済と憲政論との関連は想像以上に強い」(48頁)。
- 17) *CW5*, p.203. : 邦訳65頁。
- 18) *CW5*, p.206 : 邦訳68頁。
- 19) Buchan (1960), p.177. また Buchan は「彼は、彼の同時代人の多くの人よりもはるかに大きな程度において近代国家における権威の問題に関心を持った——ほとんどとりつかれた (obsessed) といっても良い」(同書 p.176) と述べている。
- 20) *CW5*, p.206 : 邦訳68頁。

- 21) CW5, p.378: 邦訳279頁.
- 22) CW5, p.209: 邦訳71頁.
- 23) CW5, pp.209-210: 邦訳71頁.
- 24) CW5, p.240: 邦訳108頁.
- 25) 1866年恐慌前後の事情については、クラバム(1970)、キング(1978)などを参照。またガーニー商会側から1866年恐慌を扱った業績としては鈴木(1998)が卓越している。手形交換についてはヤッフェ(1965)145-154頁.
- 26) CW9, pp.133-134: 邦訳165-166頁.
- 27) バジョットは銀行家一家に育った。父が経営する民間発券銀行のスタッキー銀行は、バジョットの生地ラングポートの金融を一手に引き受ける立場にあった。この地域で銀行券と言えば、インクランド銀行券ではなくスタッキー銀行券と言われることもあったことから、その経営規模が伺える。スタッキー銀行はイギリスで最初の株式組織の銀行の一つだった。バジョットが生前に金融界で重要な地位を占め、また経済への関心と感覚を持ち得たのは、何よりもまず生まれと、成人後に実家の銀行業務に携わったことによる。John-Stevas(1963).
- 28) そもそも「最後の貸し手」概念を最初に展開したのは、バジョットから100年ほど前のロンドンの銀行家ソーントン(Henry Thornton, 1760-1815)だったが、あまり広く認知されず、バジョットの主張をもって定式化された。またバジョットが指摘する以前にイングランド銀行が「最後の貸し手」として行動したこともあったが、それが同行の不況時における一貫した行動だったとは言えなかった。金井(1989)、鈴木(1998)、Freixas他(2000)などを参照。金井は『ロンバート街』における提言が、既に生成していたイングランド銀行の慣行を追認したものと指摘している。
- 29) CW9, p.102: 邦訳113頁.
- 30) イングランド銀行理事の仕事は彼らの副業だった。したがって当時の同行理事たちの関心は専ら商業的なものだった。
- 31) マーチャントバンカーを除いて、銀行家がイングランド銀行理事になることはできないという原則があった。
- 32) なぜならば、ひとたび恐慌が起こった時には、理事たちは副業よりも自分たちの本業を優先しがちだったからである。金井(1989)52頁.
- 33) CW9, p.161: 邦訳212頁.
- 34) 鈴木(1998)p.197., レイドラー(2001)pp.194-195. 前者では「バジョットの亡霊」「バジョットの白昼夢」として巨額すぎる準備金保有への異議申し立てが紹介されている。
- 35) CW9, p.93: 邦訳100頁.

- 36) ここで「信用」(credit)は二つの意味で用いられている。「信用」の第一の意味は客観的な人間・社会関係であり、要するに債権債務取引関係である。第二は人間の主観的・心理的要因を指すものであり、つまり信頼または信認(confidence)である。通常、経済学が問題とするのは専ら第一の意味である。だが上のパジョットのコメントを見る限り、第一の意味(金準備などの信用制度)は第二の意味(信認感覚)によって補完されている。

参考文献

[一次文献]

- Bagehot, W. (1965-86) *The Collected Works of Walter Bagehot* 15 vols., ed. Norman St. John-Stevan, London: The Economist.
- (1867) *The English Constitution*. (小松春雄訳 (1970)『イギリス憲政論』(『世界の名著』第60巻, 辻清明責任編集『パジョット・ラスキ・マッキーヴァー』)中央公論社)
- (1872) *Physics and Politics*. (大道安治朗訳 (1942)『国民の起源』慶応書房)
- (1873) *Lombard Street: A Description of the Money Market*. (宇野弘蔵訳 (1941)『ロンバード街』岩波書店(岩波文庫))
- (1880) *Economic Studies*, ed. R. Hutton.

[二次文献]

- Balfour, A.J. (1928) "The English Constitution", chapter 'Introduction to the World's Classics edition of *The English Constitution*', Oxford.
- Buchan, A. (1960) *The Spare Chancellor: The Life of Walter Bagehot*, Michigan State University Press.
- Clapham, J. (1944) *The Bank of England A History, vol.II, 1694-1914*, Cambridge, Cambridge University Press (英国金融史研究会訳 (1970)『イングランド銀行その歴史Ⅱ1694-1914』ダイヤモンド社)
- Crossman, R.H.S. (1963) "Walter Bagehot", *Encounter*, March.
- (1963) "Machine Politics", *Encounter*, April.
- Douglas-Home, C. (2000) *Dignified and Efficient*, Claridge Press.
- Eagleton, T. (1984) *The Function of Criticism: From The Spectator to Post-Structuralism*, Verso. (大橋洋一訳 (1988)『批評の機能』——ポストモダンの地平』紀伊国屋書店)
- Fischer, S. (1999) "On the Need for an International Lender of Last Resort", *Jour-*

- nal of Economic Perspectives*, Vol.13, No.4, Fall. pp.85-104.
- Freixas, X. and Giannini, C. and Hoggarth, G. and Soussa, F. (2000) "Lender of Last Resort : What Have We Learned Since Bagehot ?", *Journal of Financial Services Research* 18:1, Kluwer Academic Publishers, pp.63-84.
- Giffen, R. (1880) "Bagehot as an Economist", *The Fortnightly Review*, April/1, in John-Stevas, N.S.ed. (1978) *The Collected Works of Walter Bagehot*, Vol.11, The Economist.
- Goodhart, C.A.E., ed. (2001) "From Bagehot to Brussels: A Review of Which Lender of Last a Resort for Europe", *Open economies reviews*, Kluwer Academic Publishers, pp.443-455.
- Haley, W. (1965) "Walter Bagehot : a literary appreciation", *The Collected Works of Walter Bagehot* Vol.1., ed., Norman St. John-Stevas., London : The Economist.
- Irvine, W. (1939) *Walter Baghot*, Archon Books (1970) (渡辺弘・立川順子訳 (1981-84) 「ウォルター・バジヨット」『第一経大論集』, 第一経済大学出版会))
- Keynes, J.M. (1915) "Barrington, Mrs Russel (ed.) The Works and Life of Walter Bagehot. 10 vols. (London : Longman, Green)", *The Economic journal*, September., (1983) in *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol.XIX, The Royal Economic Society
- (1926) "Bagehot's Lombard Street", *The Banker*, March., (1981) in *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol.XIX, The Royal Economic Society.
- King, W.T.C. (1936) *History of the London Discount Market*, London, George Routledge & Sons. (藤沢正也訳 (1978) 『ロンドン割引市場史』日本経済評論社)
- (1961) "The Treasury Bill : The story of An Economist's Invention", *Midland Reiew*, February.
- Jones, G. (1980) *Social Darwinism and English Thought : The Inteaction between Biological and Social Theory*, Sussex, The Harvester Press.
- John-Stevas, N.S. (1959) *Walter Bagehot-A study of life and thought together with a selection from his political writings*, London, Eyre & spottiswoode.
- (1963) *Walter Bagehot*, London, Longman for the British Council.
- Jaffe, E. (1910) *Das engliches Bankwensen*, Zurich. (三輪梯三訳 (1965) 『イギリスの銀行制度』日本評論社)
- O'Briren, D.P. (2001) "Bagehot's Lombard Street and Macroeconomic stabilization", *Scottish Journal of Political Economy*, Vol.48, No.4.

- Laidler, D. (1991) *The Golden Age of the Quantity Theory*, Harvester Wheatsheaf.
 (石橋春男・嶋村紘輝・関谷喜三郎・栗田善吉・横溝えりか訳 (2001) 『貨幣数量説の黄金時代』同文館)
- Rockoff, H. (1986) "Walter Bagehot and the Theory of Central Banking", Forrester Capie and Geoffrey, E. Wood ed. (1986) *Financial Crises and the World Banking System*, Macmillan.
- Sayers, R.S. (1957) *Central Banking After Bagehot*, Oxford. (広瀬久重訳 (1969) 『現代金融政策論』至誠堂)
- (1978) "Bagehot as an Economist", in John-Stevás, N.S. ed. *The Collected Works of Walter Bagehot*, Vol.9, London, The Economist, pp.27-43.
- "The Genesis of the Treasury Bill (1876-7)", in John-Stevás, N.S. ed. *The Collected Works of Walter Bagehot*, Vol.11, London, The Economist, pp.405-409.
- Williams, M. (2000) *Crisis And Consensus in British Politics: From Bagehot to Blair*, London, Macmillan Press.
- Zouboulakis, M.S. (1999) "Walter Bagehot on economic methodology: evolutionism and realsticness", *Journal of Economic Methodology*, pp.79-94.
- 伊藤孝司 (1979) 「中央銀行制度の展開——バジョット『ロンバード街』についての一考察——」『商学集志』第49巻第1号, 1979年6月.
- 岩崎継生 (1949) 『バジョット評伝——英米社会学の先駆者』大学書房.
- 岩重政敏 (1962) 「バジョット論」『思想』岩波書店, No.458.
- (1971) 「国家構造における『尊厳的部分』と『実践的部分』(1) ——W. バジョット『英国国家構造論』の基礎カテゴリー」『商学論集』福島大学経済学会, 第39巻第4号.
- (1973) 「W. バジョットにおける『権威』の問題」日本政治学会編『危機状況と政治理論』岩波書店.
- (1995) 「バジョット『フィジックス アンド ポリティックス』——その標題と主題, 佐々木毅編『自由と自由主義』東京大学出版会, 1995.
- 小栗誠治 (2001) 「バジョット再考——中央銀行の「最後の貸し手」機能——」『彦根論叢』第332号, 2001年10月.
- 金井雄一 (1984) 「イングランド銀行金融政策と『ロンバート街』」『金融経済』第208号.
- (1989) 『イングランド銀行金融政策の形成』名古屋大学出版会.
- 岸田理 (1979) 『ウォルター・バジョットの研究——経済思想および経済理論を中心として』ミネルヴァ書房.

- (1983) 「ウォルター・バジョットの資本成長論」『龍谷大学経済経営論集』第23巻第2-3号.
- (1984) 「ウォルター・バジョットの生産費論」『龍谷大学経済経営論集』第23巻第3-第24巻第1号.
- 鈴木俊夫(1998)『金融恐慌とイギリス銀行業——ガーニィ商会の経営破綻』日本経済評論社.
- 添谷育志(1978)「現代イギリス思想の系譜(1)——克蘭ストンからバジョットへ——」『埼玉大学紀要 社会科学編』第27巻, 1979年.
- (1995) 「バジョット——権威・信用・慣習」(藤原保信・飯島昇蔵『西洋政治思想史Ⅱ』), 新評論.
- 大黒弘慈(2000)『貨幣と信用』東京大学出版会.
- 藤田幸雄(1987)『中央銀行の形成——イングランド銀行の史的展開』多賀出版.
- (1989) 「バジョット「単一準備銀行制度」の構造と背景——イギリス銀行業の原理の発展」『九州経済学会年報』, 九州経済学会.
- (1990) 「「古典派とバジョット」から「ピール銀行法とバジョット」まで——金融方法上の問題——」『九州経済学会年報』, 九州経済学会.
- 峰本あき子(1978)「中央銀行政策論に与えたバジョットの影響」『成城大学経済研究』No.59-60.
- 吉田忠(1978)「バジョットと進化論」『東北大学日本文化研究所研究報告』第14集.
- 若田部昌澄(2003)『経済学者たちの戦い』東洋経済新報社.

2003年7月15日受稿
2003年9月9日レフェリーの審査を経て掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)